

Title	個人化とコミュニティ概念の変容：古都・鎌倉のライフスタイル
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 政治・社会：慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.27- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88454491-00000007-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

個人化とコミュニティ概念の変容

— 古都・鎌倉のライフスタイル —

有
末
賢

はじめに

一 個人化時代のコミュニティ概念

二 コミュニティ概念の変容

三 鎌倉の伝統的生活世界

四 「伝統」の再考——「鎌倉らしさ」の構築——

おわりに

はじめに

現在、コミュニティの概念は揺らいでいる。マッキーヴァー (MacIver, Robert Morrison) がアソシエーション (association) に対置されるコミュニティ (community) の概念を提起した時、コミュニティ概念は、地域社会とか地域共同体という理解が自然であり、近隣社会か町内社会か行政単位としての地方自治体かは、議論が分かれるところであるが、いずれも地域性 (locality) は欠かすことはできなかった。しかし、インターネット時代の二一世紀に入った現在では、コミュニティの理解は、ネット上の掲示板やBBS、ブログなど「共同性」はともかくとして、顔を合わせる、対人コミュニケーションを前提とした「地域性」は全く問題ともしていないわけである。ネット上のコミュニケーションは、ハンドル・ネーム (H・N) が原則でメールによる文字の上での会話が続き、たとえ、コミュニケーションが重なった上で実際に会ったり、集まったりしても、場所を常時共有するわけではなく、通常はむしろ、パソコンの画面上だけで交流している「コミュニティ」なのである。コミュニティの概念がこのように場所や空間を固定化せず、通信上の画面というヴァーチャルな空間に求められるようになってきたのは、具体的な地域社会の側の変化なのであるのか？ それとも、情報化や個人化という時代状況の変化なのであるのか？

本稿では、それらの問いを東京圏の郊外都市であり、歴史的伝統を誇りにしている鎌倉という街を一つのケース・スタディとして検証していきたい。つまり、コミュニティ概念は、地域社会（具体的な町内や町）から出発したが、次第にコミュニティ・アイデンティティ、すなわち「鎌倉らしさ」の問題として理解され、そのうちに、地域やローカルなシンボルから情報化を通して、人々のアイデンティティの共有というヴァーチャルな空間へと移行しつつあるのではないだろうか。この仮説を検討する意味で、まず、第一に個人化時代におけるコミュニティ

イ概念を再検討していく。選択の時代とか自己責任、自己決定が強調されるが、人間には「選べる関係」と「選べない関係」が存在している。コミュニティが地域性、ローカリティや出生地（故郷）などと結びついている限りは、原則「選べない関係」であるが、パソコン画面上のヴァーチャルな空間での「コミュニティ」になれば、それはもう「選べる関係」であり、選択の時代である。そこで、第二にコミュニティ概念の変容を検討する。日本におけるコミュニティ概念は、一九六九年の国民生活審議会『コミュニティ―生活の場における人間性の回復―』という報告書に端を発している。都市社会学者・第二世代の倉沢進、奥田道大、高橋勇悦、松原治郎らは、従来からの村落共同体や地域共同体ではなくて、都市化時代の近代的価値観を担った新しい共同精神を「コミュニティ」という用語で概念化した。すなわち、地域性という個性や特殊性を持ちながら、近代的普遍性を兼ね備えた価値意識をコミュニティに担わせたわけである。しかし、個性と普遍性は、水と油の性格があり、一つに溶け合うというわけにはいかなかった。そこで、コミュニティの用語は、「地域性と共同性」の用語セットから「空間性と情報性」というネット空間の概念へとワープしていく。しかし、ネット情報やネット空間で匿名性と利害関心だけで離合集散する集団としてのコミュニティでは、あまりに儂な過ぎる。そこから、帰属意識や価値意識をアイデンティティとして再編しなおす「個人化の時代」の影響が働いている訳である。個人の自己決定は、選択を正当化し、アイデンティティを確立する重要な帰属的な行為である。コミュニティが地域性から遊離していったとき、ヴァーチャルな空間においても、ローカルなアイデンティティを求めているという事実が残ったわけである。そこで、第三に、現代都市における伝統と伝承を考察する。「伝統」の再考について、古都・鎌倉の「鎌倉らしさ」から現代・郊外都市の「鎌倉らしさ」まで追ってみる。

以上のような過程（プロセス）を通じて、個人化状況におけるコミュニティの空間性と場所性の再構築を分析していくことにしたい。

一 個人化時代のコミュニティ概念

現代社会を特徴づける議論として、個人化の議論は、私生活主義やプライベート化として一九八〇年代ころから既に始まっていた。しかし、社会の基底にある単位が個人にアトム化し、個人の自己責任や自己決定が強調されるようになってくるのは、九〇年代から二一世紀へかけてであったと思われる。筆者は以前、「再帰性」と自己決定権―ポストモダンと日本社会―という論稿においてそのあたりについて論じたが、個人化という現象は、あれから一〇年以上にわたって進化しており、コミュニティ概念の再検討にまで至っていると考えられる。拙稿「再帰性」と自己決定権―ポストモダンと日本社会―の最後で、私は以下のように書いた。「したがって、自己の再帰性、再帰的近代化を自覚したうえで、自己＝フィクションとしての「自己決定権」を行使するという社会学論的《実践》は、希有であるかもしれない。表層的なポストモダンの様相を、社会学論によってその深層まで読み解いていくことが今後、必要になってくるものと思われる。時間―空間の分離は、モダニティを相対化するのには確かに好都合であった。しかし、ポストモダンなのか、ハイモダンなのかという議論の陰で、「再帰的近代」こそがその本質を奪い取っていくように思われる。「すべてが自分に帰ってくる」としたならば、われわれはまず何を問うべきなのだろうか？」¹⁾

個人化という傾向は、再帰性と対をなしている。個人の選択、自己責任、自己決定という方向性は、コミュニティや共同性を一方で排除しかねない「厳しさ」を伴っている。現代社会は、国家か個人かという二極分解によって、近代社会を支えてきた中間集団が縮小しつつある、と言われている。家族、地域社会、学校集団、職場集団、労働組合など近代人が通過儀礼的に経験していく「親密圏」は、個人を集団の構成員としながら、また個人が集団の中で「成長」していく社会化の過程としても描かれている。このような社会化過程の中心的な社会学

概念は「地位と役割」である。しかし、社会的集団の構造、機能の面から「地位と役割」を中心として説明してきた社会学の概念は、近年の「個人化」の時代状況において、リアリティを失いつつあるとも言える。例えば、大学生の身近な生活風景においては、「親密圏」は携帯電話や携帯メールを使った通信ネットワークであり、関心のネットワークの中から自己選択によって、つながりや集団を選んでいくという情景が見られる。この場合の地位と役割は、一時的で分散的で代替的なものとして存在している。日本社会や日本文化の性格を「タテ社会」や「甘え」や「集団主義」などによって説明しても、それほど実感を込めて理解しているとは思えないわけである。

むしろ、格差や階級・階層、ジェンダー、エスニシティなどの属性における要因の方が社会学の分析用具として「なじみやすい」と言える。すなわち個人の属性、しかも「選べる関係」としての自己選択が強調されているわけである。ジェンダーやエスニシティ、あるいは階級・階層にも「選べない」要素はつきものであるが、個人化の時代は、生ある限りでの自己選択を要求している。ポストモダンの状況では、「国家か死か」という極限状況以外においては、既存の中間集団を飛び越えて、いきなり「裸の自己」に選択を迫る傾向がある。

それでは、このような個人化時代においてコミュニティ概念はどのように変容してきたのだろうか。次にこの課題を検討していこう。

二 コミュニティ概念の変容

1 個別性と普遍性

前述したようにR・マッキーヴァーがアソシエーション (association) に対置されるコミュニティ (community)

表1 ヒラリーによるコミュニティの規定（1955）

規定上の特徴的アイデアないし要素	規定の数
I コミュニティー一般 (generic community)	
A. 社会的相互性	
1. 地理的地域	
A. 自足性	8
B. 共同生活	9
血縁	2
C. 同類意識	7
D. 共通の目標、規範、手段の所有	20
E. 諸制度の集合	2
F. 地域集団	5
G. 個性	2
2. 地域以外の共通特徴の所有	
A. 自足性	1
B. 共同生活	3
C. 同類意識	5
D. 共通の目標、規範、手段の所有	5
3. 社会システム	1
4. 個性	3
5. 諸態度の総体	1
6. 過程	2
B. 生態学的諸関係	3
II 農村型コミュニティ (rural community)	
A. 社会的相互性	
1. 地理的地域	
A. 自足性	1
B. 共同生活	3
C. 同類意識	3
D. 共通の目標、規範、手段の所有	3
E. 地域集団	5
全規定数	94

の概念を提起した時、彼はコミュニティを地域性と共同性（一定の地域における生活の共同）によって包括的に規定していた。⁽²⁾ マッキンヴァー以後、コミュニティ概念については多くの議論がなされ、一義的な規定は困難であるとされている。例えばヒラリーは九四通りの規定を整理して、コミュニティは人々 (people) を含意している以外に一致点はない、との結論をえている。⁽³⁾ しかし、表1に示したように、九四の規定の三分の二に当たる七〇までが地域 (area)、共通の紐帯 (common ties)、および社会的相互性 (social interaction) を、コミュニティの主要素とみなしていることがわかる。表1を多い順に見ていくと、「A. 社会的相互性」の中の「1. 地理的地域」の「D. 共通の目標、規範、手段の所有」が既定の数で二〇という最も多い数字となっている。あとは、皆一桁で「B. 共同生活」が九、

「A. 自足性」が八、「C. 同類意識」が七となっている。

興味深いのは、農村型コミュニティ (rural community) と比べると、コミュニティ一般 (generic community) の規定数は七九と、農村型コミュニティ (二五) の五倍以上となっている点である。既

定の内容に関しても、コミュニティ一般では種類も一七種類と農村型コミュニティの地理的地域に関する規定(五種類)の三倍以上である。コミュニティ一般というか、都市型のコミュニティには、地域性と共同性という一般化した規定だけでは十分とは言えないコミュニティの多様な姿の兆しが現われているとも言える。また、地理的地域のもとでの「共通の目標、規範、手段の所有」という規定についても、「2. 地域以外の共通特徴の所有」の面と比較してみると、地域性や空間性を共有していないコミュニティの側面も意外に多くあることに気づくわけである。ヒラリーによる分析が一九五〇年代であることを考慮すると、それから五〇年後の現代社会において、コミュニティ一般から地域性の要素が低下していつていることは明らかである。ジェラード・デランティ(Gerard Delanty)は『コミュニティ・グローバル化と社会理論の変容』(二〇〇三年、邦訳二〇〇六年)において、「本書は、コミュニティという概念に今日的な解釈をほどこすことを目的としている。社会学の伝統的概念の一つであるこの言葉について検証しようとする場合、その出発点におかれたのは、社会・文化・政治の各領域で大変動が起った結果、コミュニティが今や転換期にあるという認識である。現代の世界的大変動の中にはコミュニティ概念に重大な影響を及ぼしている要因がみられ、その結果、この概念は昨今の社会・政治思想において大きな争点となっている。ポストモダンリズムやグローバルゼーション、インターネット、さらには「第三の道」スタイルの政治学に関連する展開を通して、古典社会学やコミュニティ研究が提起してきたコミュニティ概念に疑問が投げかけられている。古典的な社会学者たちはコミュニティの消滅を確信していたのであるが、事態はそれとは著しくかけ離れている。コミュニティは今日の社会・政治状況の中で復活を遂げつつあり、世界的規模でルーツ探しやアイデンティティの探究、帰属(ビロッキング)に対する欲求を生み出している。」⁴⁾と述べられている。

デランティは、このあと「理念としてのコミュニティ」「都市コミュニティ」「政治的コミュニティ」「多文化主義とコミュニティ」「異議申し立てのコミュニティ」「ポストモダン・コミュニティ」「コスモポリタン・コミ

「ユニティ」「ヴァーチャル・コミュニティ」などさまざまな概念の検討を行っている。

これらのコミュニティ概念の変容において、第一に指摘しなければならないのは、以前のコミュニティ概念が個別的で具体的であったのに対して、現代社会のコミュニティ概念は普遍的で抽象的なものに変化してきたことである。地域性と共同性を伴った具体的なものとしての「ローカル・コミュニティ」は、どのような地域社会にも現存していた。ところが現在、地域にはローカルにもグローバルにもそれぞれコミュニティにあたるものが存在し、逆にかつての地域共同体としてのコミュニティが消滅とは言わないまでも、機能を縮小している。家族コミュニティにしても、規模やライフコース上の時期も限定され、学校教育や職業、医療・福祉などの制度上の機能が拡大していくわけである。つまり、国家か個人かという選択肢の間で、中間集団としての家族、地域社会、仲間集団、同業集団などの機能は縮小してしまったと言えよう。したがって、具体的なコミュニティよりも普遍的、抽象的なコミュニティ概念が議論の俎上に上ってきたわけである。

2 地域性と共同性 対 空間性と情報性

普遍的、抽象的なコミュニティ概念は、現代都市の建築形態や住居形態とも大きく関係しているものと思われる。大都市における超高層ビルは一九七〇年代頃から建設されてきたが、二〇〇〇年代に入つての「規制緩和」「容積率アップ」によって、東京、大阪、名古屋など多くの大都市において高層化に一層の拍車がかかっている。住居形態においても集合住宅、いわゆるマンション居住が多くなり、地域性と共同性の意味が非常に変化してきている。例えば持家であれ貸家であれ、戸建の居住は、街並み、家並みの構成要素であり、地名としての**町一丁目**に対しての帰属意識もある程度は存在している。しかし、集合居住形式の場合には、自治会（管理組合）もマンション内で完結しており、共有スペースや共同管理に関しても、マンションの外に対して意識されることは

ほとんどない。都心や副都心などの業務地域においても、再開発事業が進行して「場所性」を失った、単なる近代的ビル空間が一様に増殖している。駅前飲み屋街、商店街が取り壊されて、駅ビルやオフィスビルに変化していくと、床面積は何倍にも増加するのであるが、それは空間性と情報性の一樣なる拡大を意味しているのである。高度情報化時代の現代において、高層化されたビル空間には、電話、PC、エレベーターなどのメディアは必須であり、限られた空間において、メディアを通してさまざまな仕事空間（異空間）と結びついているわけがある。

このように、かつてのコミュニティ概念に備わっていた「地域性と共同性のセット」から「空間性と情報性」のセットへと明らかに都市コミュニティにおいては比重が動いてきている。それはある意味では、地域性を基準に考えられてきた従来からの「コミュニティ論」、すなわち農村コミュニティと都市コミュニティ、日本的にいえば「地域社会論」の範囲からは逸脱し、「コミュニティは消滅した」という結論に至ってしまうのかもしれない。しかし、デランティが述べているように、政治的コミュニティやエスニック・コミュニティ、ヴァーチャル・コミュニティなどさまざまなコミュニティが近年盛んに登場している。つまり、共同性を核としたコミュニティ概念の復活、再生が現われているのである。⁽⁵⁾

3 帰属意識とアイデンティティ

現代社会においてコミュニティの意味を考えると、共同性の源流に「帰属意識とアイデンティティ」の問題が存在しているのではないだろうか？ 政治的コミュニティやエスニック・コミュニティ、ヴァーチャル・コミュニティにおいてさえ、ある種の帰属意識や所属アイデンティティは必要である。むしろ、地域性や直接関係を確認できる帰属意識が薄れてきたときに、ヴァーチャルなコミュニティへのアイデンティティや帰属意識が高

まってくるのが予想できる。

ここで、帰属意識におけるグローバル、ナショナル、ローカルの三層のレベルについて考えてみたい。例えば、EUに加盟している国々の人々にとって、EUレベル、国家レベル、ローカル・レベルは現実のものとして存在している。もちろん、すべての構成員が三層のレベルに平均的に接しているわけではないし、圧倒的にローカル・レベルの比重が大きく、次にナショナル・レベルで、グローバル・レベルの具体性は低く影響力も少ない、のである。ところが、具体的レベルとして、グローバル・レベルを持っていない、あるいはあまり実感していない日本においては、逆に抽象的・普遍的意味での「地球環境」や「グローバルイズム」がメディアを通して情報があふれてきて、ヴァーチャルな意味が肥大化しているとも言える。また、携帯電話、携帯メールなどにより、身近な情報ネットワークが「コミュニティ」の意味をヴァーチャル（仮想的）ではあるが、親密な空間に絞り込んできているとも言える。

ナショナルなレベルもローカルなレベルも、行政の肥大化や国家化、あるいは地方分権化も含めて、家族・地域社会・職場などの中間集団とは異なるレベルでのコミュニティの再編成が進行している。また一方では、パーソナル・メディア（極小化と移動体）の発展と普及に応じて、個人的世界がそのままヴァーチャル・コミュニティに帰属する可能性が高まってきている。この傾向が、個人化時代のコミュニティの変容を物語っているが、ただし、ヴァーチャルなコミュニティの可能性としては、「東アジアコミュニティ」やシティズンシップ（市民意識）などさまざまな政治的・社会的・文化的コミュニティに開かれている⁶⁾。次節では、地域アイデンティティの変容について、伝統的郊外都市としての鎌倉市を事例として分析してみたい。現代都市におけるコミュニティの変容は、伝統的な地域の場所性を失いつつ、近代都市空間としての空間性と情報性の中に埋没していく過程であると、言っても過言ではない。その意味で、古都・鎌倉における「鎌倉らしさ」を考えることは、場所性と空間性の再

構築につながっているのである。

三 鎌倉の伝統的生活世界

都市社会における伝統的世界に関しては、多くの記述や研究が存在しているわけではない。日本社会における都市化は、戦後の一九六〇年代頃から本格化し、それにともなつて都市化とは、すなわち「古いものが消えていき、新しいものが登場すること」を意味してきたようにも思われる。現代都市では、新規開発や再開発の情報が氾濫し、常に新しい施設やエリア（地域）に眼が集中しがちである。

しかし、都市社会にも伝統的生活世界はしつかりと存在している。私は東京の下町（中央区佃・月島）をフィールドとして長年、祭礼や町の社会構造について調査研究を継続してきたが、そこからも伝統的な生活世界を人々が守り、受け継ぎ、そして築いてきていることが理解できた。しかし、ある意味では私が対象とした佃一丁目（佃島）は、既に誰が見ても伝統的生活世界を有しており、典型的「下町」の範疇に入るものである。浅草や本所・深川を対象としても、あるいは日本橋や京橋、人形町などを扱っても「伝統と変化」の典型例として見えてしまうだろう。しかし私が考えている「都市化社会における伝統と変容」の問題は、戦前型開発の郊外住宅地としての「山の手」地域や戦後ニュータウンの集合住宅（団地）においても同様に、伝統と変化の問題が存在しているものと考えている。例えば、新中間層（サラリーマン階層）の出現と郊外住宅地域の開発は、大正期から昭和初期にかけて、東京、大阪など一部の大都市の「山の手」地域から始まっている。このような「伝統」が、日本のミドル・クラスの典型を形成し、そして戦後高度経済成長によって全国的に波及し、そして一九七〇年代あたりからミドル・クラスのライフスタイルにおいて、新たな「変容」が始まっているのではないだろうか。核家族で

職住分離、性別役割分業によって専業主婦を肯定していたライフスタイルから、都市居住の在り方も職住近接、共働き、余暇生活重視のライフスタイルへと少しずつではあるが、変容が見られるのである。

本節において、私は鎌倉市を対象として「伝統的生活世界と郊外化」を考察していきたい。⁹⁾ まずなぜ「鎌倉」をフィールドとするのかについて、四点くらいに整理して指摘しておきたい。

第一には、関東以北の地域では唯一と言っていいだろうが、鎌倉は「古都」である、という点である。古都とは、現在の首都 (capital city) とは異なって、かつての都 (みやこ) を意味している。日本では、奈良、京都、近江など近畿地方に集中しており、場合によっては沖繩における首里なども古都に含まれるものと思われる。確かに、鎌倉時代 (一一八五―一三三三年) は現代人にとってはあまりに遠い「過去」であり、かつての「都」という意識が京都のように存在していない。そういう意味で厳密には、日本では古都是京都だけなのかもしれない。しかし、京都や京風においても全国に「小京都」があるように、「古都の風情」は鎌倉にも確実に存在している。伝統的生活世界の「伝統」を伸ばせるだけ伸ばしてみたとき、関東地方では「鎌倉市」が浮かんできたわけである。

そして第二には、鎌倉は全国各地に存在している「城下町」ではなく「門前町」であったという点である。都市の生活世界に注目するならば、日本は圧倒的に江戸幕藩体制の中で形成された「城下町」の伝統に支配されてきた。その意味では、現代の大都市も地方中核都市も地方都市もその多くは城下町である。しかし、都市の形成はその他にも港町 (港湾都市)、門前町 (宗教都市)、宿場町 (街道町) などさまざまな要素から発展している。鎌倉市は鎌倉五山や鎌倉大仏、鎌倉八幡宮など宗教施設 (寺社勢力) を背景とした町である。関東地方にも有名な神社仏閣を有した町は他にもあるが、歴史的な価値を持った門前町となると関西地方に比べてそう多いわけではない。

第三は、鎌倉市が首都圏の郊外化に影響を受けた都市であるという点である。戦前からの都市社会学者であった奥井復太郎（一八九七～一九六五年）は、昭和一二（一九三七）年にすでに「鎌倉調査」を実施しており、郊外化に注目していた。また、近江哲男（一九二二～一九八三年）を中心とした東京市政調査会による「鎌倉調査」も昭和二八（一九五三）年に行われ、報告書が一九五七年には刊行されている。このような先行研究の上に、二一世紀初頭にあたる現在の鎌倉市を郊外化との関連から見つめ直してみたいという意図がある。⁽¹⁰⁾

さらに第四点としては、鎌倉市が近代初期からの「別荘地」「避暑（寒）地」そしてリゾート・観光地域としての性格を有している点である。もちろん、海、山、谷（やつ）、丘などの自然的、地形的な特質もあるし、明治の文明開化の時期から外国人（西洋人）を含む政治家、文化人、実業家、上流階級などの人々の別荘地として賑わい、そして観光・リゾートが大衆化してからは、逗子、葉山や江ノ島、湘南海岸とも連続して、「海水浴」を中心とした夏のレジャーの中心地になっていったわけである。

このような重層的な鎌倉市の地域像（イメージ）こそが、コミュニティ概念の変容において場所性と空間性の再構築に結び付いているものと思われる。

四 「伝統」の再考——「鎌倉らしさ」の構築——

古都・鎌倉には言うまでもなく歴史的・伝統的な遺跡や神社・仏閣などが数多く存在している。近年の「鎌倉考古学研究所」の成果によって、中世都市・鎌倉の全貌が少しずつ解明されてきており、その面での鎌倉への関心も高まっているが、ここでは必ずしも実際の中世都市・鎌倉の実像が大きな意味を持っているというわけではない。観光都市・鎌倉の観光資源は鶴岡八幡宮や長谷の大仏、紫陽花寺の明月院、北鎌倉の円覚寺、東慶寺など

ほとんどすべて中世以来の伝統を持った寺社であるが、しかし、現代人にあつては鎌倉時代と現在がつかつているといふ確信も保証もないのである。したがつて、現代の鎌倉住民には鎌倉時代の源氏の武士たちのことや当時の町民を引き継いでいるという意識はないといつてよいだろう。むしろ、そこにあるのは「古都・鎌倉」を演出する現代のさまざまメディアによる「イメージの再生産」であると思われる。

鎌倉は言うまでもなく、鎌倉幕府が置かれた中世の都であつたが、一四世紀の半ば近く、鎌倉幕府が滅亡する折の兵火で、ほとんどは炎上した。市政施行五十周年記念『図説 鎌倉年表』（一九八九年）においても、鶴岡八幡宮再建のために社頭の古木を調査した記述のある天文元年（一五三二年）からが年表の最初になっている。¹¹つまり、中世鎌倉は、以後うちつづく戦火によって壊滅状況となり、閑散とした草深い農村として近代にいたつたのである。

その意味で、近代の鎌倉は、いわば「再発見」の過程でもあつた。お雇外国人や明治時代の政界・財界・文化人などによる、別荘や海水浴、古寺、大仏などの名所・旧跡の再発見、観光の位置付け、そして郊外化と鎌倉ブランドの定着へと近・現代の鎌倉は変貌していくわけである。ここで、興味深いのは鎌倉が歴史の時間軸上は、「古都」から「農村」へ、そして近代の「眼差し」によつて、「近代鎌倉」という都市へとその意味を変えてきたという点である。関幸彦は『鎌倉』とはなにか―中世、そして武家を問う―（二〇〇三年）において、「I. 近代は鎌倉になにをみつけたか」「II. 近世は鎌倉になにを残したか」「III. 中世は鎌倉になにを創つたか」という順番で説き起こしている。¹²この時間軸の「逆転」こそが「古都・鎌倉」のイメージの生産と再生産を枠付けしてきたのではないだろうか。

そこに日本の古都の代表である「京都」を研究対象とする地域社会研究とこの「鎌倉市」を対象とするわれわれの歴史社会学的な考察との相違が存在している。従来型の都市・地域社会の実態調査による解明は、まず何

よりも現在居住している住民の実態と意識を研究対象として考察してきた。また文字資料や統計資料などを利用して、過去からの歴史を明らかにしていく歴史研究では対象時期を限定することでより詳細な歴史が明らかになったわけである。しかし、これらの研究は、いずれも現在と歴史を切れた形でしか表現できない。われわれの意図は、地域性と歴史性が綯い交ぜになりながら構成されてくる現実の地域社会を「近代鎌倉」というフィールドを通して理解し、説明していくところにあるのである。

「鎌倉らしさ」という言説は、住民のみならず、観光客や全国の人々によって、ある程度共有されている。日本全国で、この「らしさ」が成立する都市は、京都、奈良、東京、大阪など多くの歴史的な都市でも見られるが、郊外化された多くの住宅地域においては、なかなか地域アイデンティティが確立されていない場所も多い。そこで、われわれは「鎌倉らしさ」の実態について調査研究していくと同時に、「鎌倉らしさ」が構築されていく過程に注目して研究を進めている。例えば、「鎌倉夫人」という小説や言説が一定のリアリティをともなうて成立していく時代背景や地域性を検証していくわけである。また「社会調査」を再検討する中から、調査研究者の主体や対象地域、そして時代背景などが「鎌倉調査」によって「鎌倉らしさ」とどのような関係にあったのかが問われてくるのである。さらに、戦前からの鎌倉山の開発における笛田、手広などの地元の農村、農家との関係なども「鎌倉らしさ」の構築が微妙に反映していると考えられる。鎌倉の特徴は、観光都市としての名所・旧跡・寺社ばかりではなく、海・山・浜辺・緑・谷戸など自然の要素も加わっている。これらを、うまく組み合わせることによって、寺社の「花めぐり」などいわゆる「鎌倉らしさ」の演出も構築されていくわけである。そして、住民にとっての「鎌倉らしさ」も旧住民から新住民へ、住民運動や環境問題に対する行政・開発業者（資本）・住民のそれぞれから考察されることになるであろう。

研究対象とした鎌倉市は、行政範囲としては、江ノ島まで含む腰越地域や大船駅周辺地域、横浜市栄区と接し

ている北鎌倉地域や逗子市と接している浄明寺や十二所など広大な範囲を有している。もちろん、鎌倉の中心部の御成町、大町、小町、材木座、由比ガ浜など一つ一つのコミュニティの中に、地域性と歴史性が緋い交ぜになって相互構築されていくそれぞれ固有の「鎌倉らしさ」が存在している。しかし、近代鎌倉における「鎌倉らしさ」は、コミュニティの内側からの「らしさ」の構築ばかりではない。それは、郊外化と観光化という外部からの要因によって、むしろ「鎌倉らしさ」が外部から作られていく過程とも重なっているのである。そこで、われわれは研究対象地域にとって、地域社会（コミュニティ）の範囲を町（町内）あるいは町丁目としつつも、行政範囲としての「鎌倉市」を全体の相互構築を視野に入れて対象地域と考えた。さらに、「鎌倉らしさ」という場合には、近代日本の都市化、郊外化、観光化などの社会変動を経て、外部からも形成されうる地域性（らしさ）であると考えられる。したがって、コミュニティ内部だけを追究するのではなく、地域性と歴史性の相互構築をテーマとしたわけである。

「近代鎌倉」の伝統として大きくは二つの局面に分けることができる。時期としては明治・大正の第一期における伝統Ⅰは、洋風化と別荘地のライフスタイルである。文明開化の影響においては横浜などと共通する面もあるが、鎌倉は「古都」としての再発見の過程を辿ることになる。また寺社・名所・旧跡などは「王政復古」の流れと呼応している面もある。別荘地としてのライフスタイルは「鎌倉同人会」などの上層の階層文化を生み出していくのである。昭和期から戦後の近代鎌倉の伝統Ⅱの局面においては、郊外化のインパクトによって別荘地から定住地への「変貌」が見られる。その意味で「鎌倉らしさ」の伝統は、初めから「郊外住宅地」として出発した、東京圏の良好な住宅地域、例えば田園調布や桜新町、国立や常盤台などとは性格を異にしている。むしろ、別荘地の階層文化を背景として展開した「郊外化」は、必ずしも良好な居住環境を確保するとは限らない、スプロール化や自然破壊を伴う宅地造成が行われていたわけである。したがって「鎌倉らしさを守る」「保持する」

という郊外化に対する負の対応が地域性と歴史性の相互構築として現れてくるのである。また、観光化においても、近代の伝統は「大衆観光」「行楽地」としての性格である。したがって、八幡宮にしても長谷の大仏にしても、また由比ガ浜、材木座、江ノ島においても「世俗化」を免れ得ないのである。上層の階層文化は、住民にとって象徴的な「鎌倉らしさ」を構築していくことになるのである。

戦後の首都圏の郊外化は、通勤圏として東海道線、横須賀線、小田急線、京浜急行線など郊外電車の運行と密接な関係を持って出現している。したがって、郊外化のインパクトからすると鎌倉市は隣接する横浜市、逗子市、葉山町、横須賀市、藤沢市、茅ヶ崎市など同様の性格を共有し、通勤・通学の時間距離の関数として居住地選択が行われる側面が存在している。しかし、それにもかかわらず「鎌倉らしさ」が希薄化しつつも再生産されていく面がある。例えば戦前型開発としての鎌倉山の場合には、立地や交通など決して便利とは言えないが、別荘地開発からの伝統が「鎌倉らしさ」を維持し、周辺の住宅地開発に対しても影響力を保っているのである。また、鎌倉の文化人居住者たちも、確実に「鎌倉らしさ」を演出している。寺社などの文化財は物としての観光資源であるが、居住者としての文化人たちは、住民にとつての資源、財産でもある。さらに、地形と緑地などの自然資源が「鎌倉らしさ」の構成要素である。海浜・砂浜・山・谷（やつ）・切通しなどは、開発の波にもかかわらず、今でも鎌倉住宅地域の不動産の「セールス・ポイント」である。このように、郊外化のインパクトは、通常の地域アイデンティティ（らしさ）を希薄化する方向に進行するわけであるが、鎌倉の地域性と歴史性は依然として「鎌倉らしさ」に固執する様相を呈していると言えるのである。

「鎌倉らしさ」は、地域性と歴史性の相互構築によって形成されていくという仮説のもとで、今まで論じてきたが、これは、鎌倉の内部と外部の重層的なライフスタイルの形成とも重なってくるものと思われる。つまり「鎌倉らしさ」の外部からのイメージ形成としては、第一に「近代鎌倉」の伝統の物語が挙げられる。「古都」のイ

メー、文化都市のイメージ、上層のイメージなどである。第二には社会変動としての郊外化と観光化の進展である。そして第三には、「生活感」を排除した都市イメージの構築である。「リゾート都市」という不動産販売のイメージと言い換えてもよいだろう。それに対して、「鎌倉らしさ」は鎌倉市という地域性の内部でハビトウスとしても形成されていく。つまり、外部からのイメージが相互作用の中で内部化され、住民としてのライフスタイルになっていくのである。腰越、大船、浄明寺など鎌倉の中心部からは離れた地域においても、鎌倉市のライフスタイルは共有され、「鎌倉らしさ」が再生産されていくのである。

おわりに

今までコミュニティ概念の変容について、個人化時代や選択の時代、自己決定権などを検討し、さらに個別性対普遍性、地域性と共同性対空間性と情報性という再編成を分析してきた。そして、歴史的伝統を誇りにしている鎌倉という街を一つのケース・スタディとして検証してみたわけである。つまり、コミュニティ概念は、地域社会（具体的な町内や町）から出発したが、次第にコミュニティ・アイデンティティ、すなわち「鎌倉らしさ」の問題として理解され、そのうちに、地域やローカルなシンボルから情報化を通して、人々のアイデンティティの共有というヴァーチャルな空間へと移行しつつあるのではないだろうか、という仮説である。確かに「鎌倉らしさ」は場所性と空間性の重層的構成や寺社、海、山、谷戸などの観光資源や郊外住宅地、リゾート性などの付加価値なども加えて、イメージとして構築されている。それは、現実（リアル）のコミュニティであるよりも、仮想的（ヴァーチャル）なコミュニティである、と言った方がよいかもしれない。しかし、現実のコミュニティが「鎌倉らしさ」を喪失しているのかというとそれは必ずしも正しくはない。「鎌倉らしさ」は、ある意味での「地

域アイデンティティ」であり、シンボルでもある。住民層が交代していても、土地や地域に残る固有のアイデンティティだとするならば、それは非常にリアルなコミュニティ概念であるということもできよう。

現代のコミュニティ概念は、地域性と歴史性と共同性が緋い交ぜになりながら、空間性、場所性、アイデンティティ性を再構築していく過程であるとも言える。そこで、本研究の今後の課題として三点ほど指摘しておきたい。まず、歴史性をより深く解明していくためにも地域史をよりどころにして、伝統の作り変えや読み替えなどを具体的に検討していく課題が挙げられる。また、第二点として地域性としての鎌倉は、必ずしも「住宅地域」にだけ限定されるわけではない。商業地域や観光地域、文化施設などについても「鎌倉らしさ」を追究していく必要があるものと思われる。そして最後に、ポストモダンと言われる現代において、鎌倉市の新たなライフスタイルとは、一体何なのか、少子・高齢化、女性の社会進出、障害者などへのケアなども含めて、より具体的に見ていく課題があるものと思われる。

(1) 有末賢「再帰性と自己決定権―ポストモダンと日本社会―」田中宏・大石裕編『政治・社会理論のフロンティア（慶應義塾大学法学部政治学科開設百年記念出版）』所収、慶應義塾大学出版会、一九九八年、二七五頁。『個人化社会』（*The Individualized Society*）において、「存在のあり方」「思考のあり方」「行為のあり方」を解明し、「個人化された社会に政治は存在しうるのか」「個人化された社会を民主主義にとつて無害なものにすること」などを解説し、「個人化の裏面は市民的行動の腐食であり、そのゆっくりとした崩壊でさえあるように思える」とジグムント・バウマン（Bauman, Z.）は述べている。ジグムント・バウマン（澤井 敦／菅野博史／鈴木智之訳）『個人化社会』青弓社、二〇〇八年、七一頁参照。

(2) Machver, Robert M. 1917, *Community*, Macmillan. 中久郎・松本通晴監訳（一九七五）『コミュニティ』ミネルヴァ書房、四五―六八頁。

- (3) 奥田道大「コミュニティの形成基盤」山根常男・高橋勇悦ほか編『テキストブック社会学（5）地域社会』所収、有斐閣、六六頁より引用。
- (4) Gerard Delanty, *Community*, Routledge, 2003（山之内靖＋伊藤茂訳）『コミュニティ・グローバル化と社会理論の変容』NTT出版、二〇〇六年、三頁。
- (5) コミュニティ概念の復活、再生ではないが、田中重好は、「私の地域社会研究は「地域社会の衰退」「地域社会の崩壊」から始まった。」と述べ、「地域社会の中で共同性はどういった形で存在しているのだろうか、という問いから出発して研究を進めてきた。」と述べている。田中重好『共同性の地域社会学―祭り・雪処理・交通・災害―』ハーベスト社、二〇〇七年は、参考になる。
- (6) 慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻、社会学研究科社会学専攻などによって、「叢書21COE-CCC 多文化世界における市民意識の動態」二〇〇五～二〇〇八年に研究成果四四冊が出版されている。有末賢・関根政美編『戦後日本の社会と市民意識』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年、渡辺秀樹・有末賢編『多文化多世代交差世界における市民意識の形成』慶應義塾大学出版会、二〇〇八年など参照。
- (7) 有末賢『現代大都市の重層的構造―都市化社会における伝統と変容―』ミネルヴァ書房、一九九九年、所収の第八章「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭礼組織の研究―」など参照。
- (8) 有末賢『都市化の構造と「郊外化」現象』『都市問題』第九三巻第五号、二〇〇二年五月、三一―四頁、参照。
- (9) 「鎌倉研究会」（有末賢、水野宏美・松尾浩一郎・泉暁・高岡文章・上野淳子・土居洋平・高木恒一）によって、二〇〇三年一月一日に中央大学で行われた第七六回日本社会学会大会の一般研究報告Ⅰ（自由報告）部会での七報告のレジюмеなどを収録した『近代鎌倉における「鎌倉らしさ」の構築』二〇〇四年五月、鎌倉研究会があるが、最終報告書はまだ完成されていない。
- (10) 松尾浩一郎「奥井復太郎と近江哲男の鎌倉調査―都市社会調査の戦前と戦後―」『法学研究』第七六巻第六号、二〇〇三年六月、慶應義塾大学法学研究会、四一―八二頁、参照。
- (11) 『図説鎌倉年表 自天文元年 至昭和六十年』鎌倉市（市制施行五十周年記念）一九八九年。

(12) 関幸彦 『鎌倉』とはなにか―中世、そして武家を問う― 山川出版社、二〇〇三年。